

## 回復の望み

アモス書9章

その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕い、そのくずれた所を興し、これを昔の時のように建てる。(11)

アモス書はこれまでイスラエルの背信に対する神の厳しい審きの言葉が語られてきましたが、この11節以下、本書の最後はこれまでの著述とガラツと変わつて、一度は滅ぼされたイスラエルがやがての日に回復されることが告げられています。

これまで、「主の日」を意味する「その日」という表現は、神の審判が下される日として使われてきました。しかしこの11節に出てくる「その日」は、背信の罪のゆえにイスラエルの民を滅ぼされる同じ主が、そのイスラエルを回復させてくださる日として言及されています。「その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋を興し、その破損を繕い、そのくずれた所を興し、これを昔の時のように建てる」。アモスは、イスラエルの将来に滅びが待っていることをはっきりと見ていたのと同時に、そのさらに先にも主による回復があることを望み見ていました。契約の神を信じる者は、たとえこの世がどんなに暗闇に覆われていたとしても、はるか彼方に主が与えてくださる希望の光を見出します。かすかな光であつたとしても、主の約束に基づいた希望の光を見ているからこそ、厳しい審きを語ることができたのです。

絶望的な状況に立たされることがあつたとしても、わたしたちは主に向かつて信仰の目を上げ、主が与えてくださる回復の約束に望みをおく者たちでありたいと願います。